

献辞

松 田 美作子

2025年3月末をもって、鶴見良次教授は成城大学を定年退職される。1989年、成城短期大学に専任講師として着任され、2002年、教授に昇任、短期大学の廃止により2004年、成城大学文芸学部に移られ、実に36年の長きに渡り成城大学の学生の指導、ならびに大学の発展に尽くしてこられた。大学院文学研究科英文学専攻では、『成城イングリッシュモノグラフ』記念号を刊行し、先生への深い感謝を表すことにした。

先生のご専門はイギリスの子供の読書の歴史である。最初のご著書『マザー・グースとイギリス近代』（岩波書店、日本児童文学学会特別賞）の研究は、イギリスの伝承童謡・童話「マザー・グース」の受容と変容を辿った、フォークロアや児童文芸、出版文化、社会史の幅広い見識に裏付けられたものである。その成果はケンブリッジ大学出版局の児童書事典やオックスフォード大学出版局の民俗学辞典などにも掲載、引用されている。母校筑波大学でスタートされたマザー・グースや妖精物語などの子供の読書の研究は、その後、おもに庶民の子供たちのための読み書き教育とその教科書の歴史へと展開され、『イギリス近代の英語教科書』（開拓社）にまとめられた。目下、ラテン語教育の衰退と英語教育の興隆に関する最新作を準備されている。それらは、いずれも堅実な英語・英文学研究のディシプリンによって成り立っており、ミクロな資料の分析からイギリス社会をマクロに読み解く、先生の慧眼と堅牢な洞察力がなければ成り立たない。

幅広いご関心と堅実なご研究は、学生の指導にも反映されている。英語文化の授業で、先生は長年ディズニーを取り上げ、一貫して地域研究や文化研究を学生にわかりやすく示してこられた。ディズニー研究は現代の英語文化を専攻するうえでの必修科目の1つであるとお考えである。ま

た、人気のゼミナールでは、決して学生の関心を否定せず、忍耐強く対話される。先生のゼミ生の卒業論文を副査として数多く読ませていただいたが、トピックの多様さと英語の参考文献を適切に用いていることは印象的であった。英語圏の文化研究だからテーマが多様で英語文献が多いのは当然だが、それぞれの論文にはテーマの分析方法やその意図が平明な英語できちんと記されていた。大学院生に対しては、英文学専攻のさまざまな分野の研究課題に取り組む各学生の創意と実力を信じ、修士号、博士号の取得まで、懇切な指導をしながら見守っていらした。鶴見ゼミからは多くの優秀な卒業生や修了生が輩出し、大学や中学校、高校での教職をはじめ、各界で活躍している。

大学運営での先生のご功績としてまず挙げたいのは、英語・英文学教育のカリキュラムの策定に常に指導的な役割を果たされたことである。短期大学部教授でいらした頃、社会イノベーション学部設置準備室の英語カリキュラム担当者として、同学部の定評ある英語教育の基礎を作られた。その後文芸学部に移られてからは、英文学科のモットー、「英語を学ぶ、英語で学ぶ」を定め、英語学、英語文学、英語文化という三本柱でわかりやすく学科の教育内容を整理なされた。変化する文科省の方針に伴う学科のカリキュラムの見直しに際し、学生主体で進められる新しい専門科目のコンセプトのもとに「アカデミック・プラクティス科目群」を考案したのも先生である。英文学科主任、大学院文学研究科英文学専攻主任を長くお務めになり、重要な問題には、一時の情勢に左右されることなく信念を貫き対処された。程度の差はあれ、幾度も「長い土曜日」(George Steiner)に惑い、進路が見えないとき、先生のおかげで日曜日を迎えられるのである。

そうした研究、教育、アドミニストレーション、すべての面における一貫した姿勢は、先生のお姿そのものでもある。私が成城大学に着任した2005年に初めてお会いしたときから20年を経ても、先生の体重はきっと10代の頃と変わらないはずだ。10代と言えば、先生ご自身は「高校生の制服の真似」とおっしゃるが、暑い夏の日も、白のワイシャツにネクタイ、紺のスーツ姿の先生からは、ケンブリッジのコレッジのハイ・テーブルに着くお姿も想像に難くない。若き日に、先生がホマトン・コレッジで指導

を仰がれた Elisabeth Brewer 先生もとうに鬼籍に入られたが、先生の歩みを空から目を細めてご覧になっているに違いない。

夏休みに入る前、先生に「もうすぐご退職というのは、どのようなものですか?」とお尋ねしたら、「楽しみでしかない」というお返事。忍耐のある学生の指導や長い会議がなくなることがうれしいのではなく、思う存分文献を調べ、研究できることが楽しみなのに相違ない。稀有な英文学研究者として、これからも先生が歩みを止めることはないだろう。そして、よき英文学科の伝統を継いでこられた先生、私たちがそれを忘れ去ることがないよう、今後も英文学科の屋台骨が傾くことのないよう、お見守り下さいと願わずにはいられない。